



B 21

2507



松本英忠著

卷之一

小學農家讀本

明治十二年

一月版權免許

文榮堂

有恒堂 梓

新 廿二回

小學農家讀本卷一

松本英忠 編輯

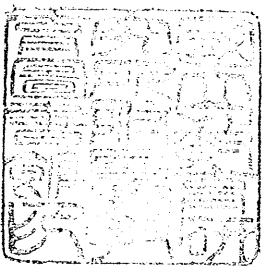
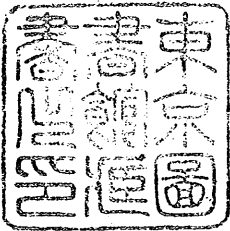
第一

凡農ハ、國の本ヨリて、萬物、生養を得るの道を
人たる者、勉えて、之、戦勵む可し、

夫、人ハ、如きものも、食す可き、業を、知、其、食
物を、作るの法を、知らざらば、ならず、

食物と、お、成すべきものを、作り、又ハ、其、作り、多る品
を、製するを、農業と、し、

農業ハ、工商も、優りて、國家、富饒の基を、成、人



農家讀本

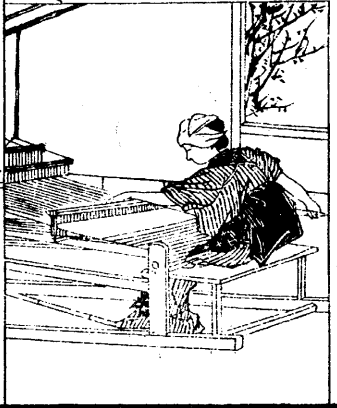
卷之一



人、心を用ゐて、之を學ぶ可
農業を學ぶも、勉強する
を、第一とし、勉強せざれば、
其道は、精ハキこと能ハ
ず、

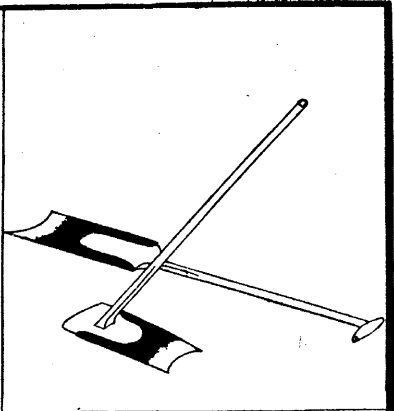
農業は種々あり、○第一ハ、耕作なり、○耕作ハ、
田畠を耕して、穀物野菜を作ること也、
第二ハ、牧畜なり、○牧畜ハ、食用、又ハ耕作に、使
用する為、牛、馬、犬、雞、豚、飼ふをいふ、

第三、種藝なり、○種藝ハ、穀物、野菜の外、農家、必
要の樹木、杯を植ふるをいふ、
第四、製品なり、○製品ハ、田畠より、生ずる者、裁
製し、日用の要品と、為るをいふ、
夫を、一人、耕作せし、十人の食なりといふも、出
精して、心を盡き、其ハ、其
量なりと知る可し、又、耕作
は、数々の心得あり、まづ、農
家ハ、我身上の分限を、能く
計りて、田畠を、耕作するを



備へを爲はべし。

夫は、一年の計ハ、春の耕スあり、一日の計ハ、鶏鳴
ニあることなきハ、未明ニ起て働き、且、其日の仕
事を必ず、前夜より考へ定む、曉方ニ至らハ、天氣
の晴雨ニ因りて、其日の仕事の手配せよ、
農家の、最注意は可き也、農具なり、農具悉くけき
ハ、如何程、精力を盡はといへとも、仕事の志るし
なきもの故、少一の費用をいともばして、能き農
具を用ゐべし、又、田畠の相應より、多く貯へ置
く可きあり、



かゝる類

農具ニ種々あるとも、鋤、鍬を第一といふ

鍬の類多し、諸國とも、其地ニよりて、形も亦少く
異なり、是は、地味ニ随ひ、昔より、遣ひ慣れた

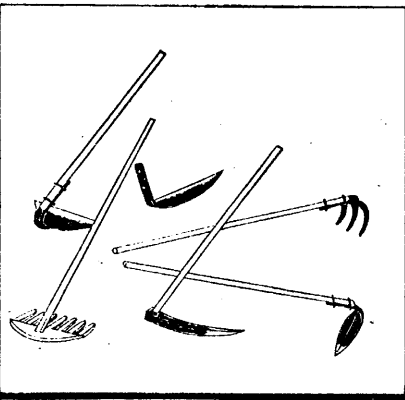
土地の仕来りよて、農具の
種類ハ、多くなくとも、事を
欠かぬ、足れりといふ者
あるとも、其用ニ従ひ、其器
あれハ、徒らニ、日費費し、カ
を勞むることなく、其功速

了者を礼と能く、其理を考へ、力減省きて、功多きを
 を用ゐ可し、黒鉄、唐鉄ハ、樹根、又ハ、竹杯を掘起す
 によく、備中鉄ハ、多く田に用ゐ、鋤も種々の形ありて、
 一様ならず、其用ハ同一く、鉄と並
 ひ用ゐらるるなり、縦令へハ、将棊の飛車と、角行
 の如し、
 土地によりて、鋤を用ゐざる處、阿基とも、遣ひ慣
 まざるゆへなり、講をほり、麥田の畦底を、さらふ
 杯によく、殊に、濕地を用ゐて、最便利なり、尚、其他
 土切、刈付等の器あり、亦鋤の属ひなり、

馬把ハ、水田を耕す時、牛馬に引らしめて、土を鬆
 らしむる器なり、別は、手把りて、土を墾し、草を
 去るに用ゐる器あり、是を把とり、其他、地平、熊
 手、万能、草削、鷲の嘴、杯、尤、耕
 作必需の器械なり、

第二

穀類に限らば、動植物共、皆
 種を擇ぶこと肝要なり、種
 惡しければ、一旦、生長して、
 繁茂するも、後必す凋萎を可し、故に穀類杯ハ、尤



く、能く實のり、一色より、大小の差を、揃ひ
をよるといふ。

抑植物の種より、自然より、發生の氣を、胎より、その
なまは、其氣の發露せざるや、蓄ふるを專一
といひ、且、これを擇ふとも、稍杯を、殊より、雌穗の種を、
見分くること、肝要なり、

植物の種より、水より、入るく、皆沈むものなき共、芽
の出るときは、發生の氣、盛りとなり、悉く、水面より
浮かぶり、

同一種類の植物よりも、種の良否より、利益

の相違、阿まも、心を用ゐて、好き種を擇び、風、又ハ、
濕氣より、ぬきざるより、貯ふ可し、

総て、植物ハ、寒温の氣より、生長せざるもあ
きど、多くハ、耕作の、勉不勉と、種の良否と、依る
者方より、能く、工夫を盡くし、培養、其宜しきを、得
れば、必し、繁茂して、利益を得らるべきなり、

扱、其次ハ、糞養なり、糞養とハ、糞比ち、ちり、やいな
ひより、瘠薄の地をも、變じて、良田と、なれり、ことよ
して、亦農家の急務といふ、

夫は、人少く、田地、あまり、阿る頃より、年々、地を



替へ、或ハ、二三年も、地を休息おきて、作りかゝる
 糞養おろすかゝても、植物、よく生育して、實のり
 けきと、需用も、乏しからさ
 ば共、後世ハ人、衆くなり需
 用も、亦多分なきハ、地力を
 養ふこと能はぬ、故又、糞養
 を用ゐて、發生の氣を、助け
 さばハ、利益なり。

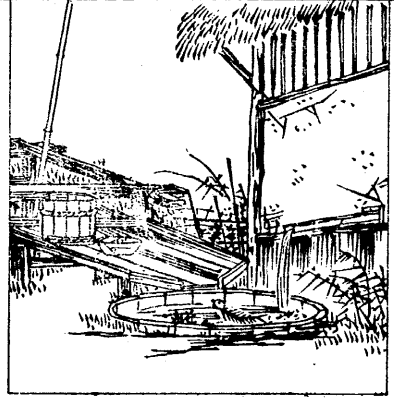
○田畠を、肥すは四種あり、苗糞、草糞、灰糞、泥糞と
 いふ、尿尿と、合して用ゐると、何れ、又、一種、水糞と

称するも、何れ、地味と、植物より、其區別、何れ、
 ○苗糞とは、菜豆を上と、小豆、胡、芥、の次と、
 大豆、蠶豆もよ、五、六月、頃、田も、厚く、蒔き、能き程
 2、榮えたるを、七、八月、犁、ついで、其翌年の春、穀
 田と、まると、なり、さきども、これハ、瘠地多くして、地
 を、休むることを得る處も、あらさきも、能はぬ、
 ○草糞とは、草木の、繁り榮えある時、刈りて、日光の
 障りなき地も、積り、車、杯、屋根を作り、之を覆ひ、蒸
 せ腐りたるを、細かき切り、尿尿を注ぎて、後、日又
 乾かして、あるは、植物を、畝も、植うる時、敷糞と、又

ハ、種又混して蒔かり、粘土、堅土杯よ、ハ、尤よーと
 以、其他、若き柴や、草杯を、其儘、入るもよー、
 灰糞と、ハ、草木、又ハ、莖、芥等の類を、法より経て、
 ちり焼きよー、其灰を、濃き糞と合せ、麥、苧蒔き、又
 ハ、菜、蒔植るよー、必ら、以、去
 の糞を用ゐ、其効、鮮から、以、
 多く貯ること、採、得るの地
 ハ、深田、泥、田等よ、入るまハ、
 大よよーと、以、
 泥糞ハ、池、河、溝、杯の底よ、以、



る、肥たる、泥を揚、け、能く乾らし、搥き、熱氣つよき
 糞と、合せ用ゐまハ、其志るよーつよー、



其他、けららよーきもの、又ハ、
 濁り水、沐浴の垢汁よ、到る
 まで、糞桶又貯へおき、湧き
 腐りたる時、用ゐれハ、大よ
 利あり、之を、水糞と、以、総
 て、水糞ハ、桶を用ゐ可し、瓶

の類ハ、己き法、ふきすして、きく、免薄し

土地よ、肥瘠、以、共、能く培養の術を、盡くし、其地

質も適合せる、糞養を用ゐるべきを、其初一なりと爲
 され
 地質弱く瘠たるよハ、鰯油
 糟、又ハ、尿杯の補養を用ゐ
 肥壤よして却て實のりな
 きハ、河溝等の泥状能く回
 一、碎きて用ゐるをよしと
 以、
 濕氣の地ハ、灰糞を用ゐ、これを温灸乾きたる地
 以ハ、水糞を用ゐ可し、



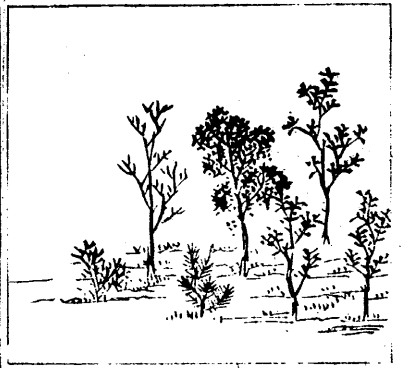
糞養ハ、植物の藥材なきを、其の地質の、病根よ
 りて、取り合はれハ、医師の、藥を加減するも、一色の
 品を、うりならざると、同一道理と知る可し、
 何事よらば、他人の、一た
 ひして、能くまゐることハ、百
 たひも、それを試み、他人比
 十たひして、なせ一業ハ千
 たひも、爲して考ふれハ、決
 して、ちらざることを、學
 問も、亦、斯の如く、人よりも、勉強して、怠りなく習

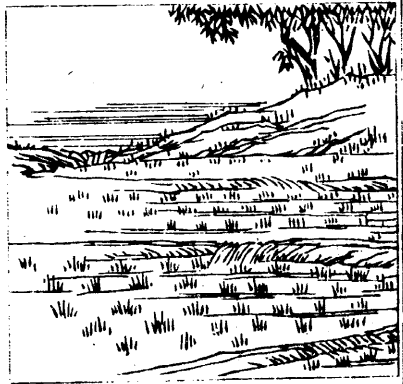
ふ時ハ、後ヨリ、智識ある、有用の人と、なるを得可
し。
學問をまゐるハ、植物ノ糞養をまゐる如ク、培養して、天
然ノ良質を、成長せしむるノ業を、人々、書籍
ノ器械ニ因りて、吾心を耕作せ可し。

第三

土地ノ性質ニ因りて、植物を培養せざるニありや
きハ、徒勞を免き以、故ニ、田畠又ハ山林とも、地質
と、便利を考へ、適當ノ植物を作るハ、農家ノ、忽ニ
為レべららざる要務なり。

地質ノ上等なるハ、必ク、青黒キ小石ノ、雜ハまる
地ニあり、又、黄色キ土にて、鋤も粘カク、質比重
きもよしと云。
耕作ノ地を擇ぶニ、第一、方位と水利ノ、便否を
考へざる可し。方位、悪
くして、日中を過ぎ、日
りけを生し、水くりにき
等と、耕作ニ便ならず、
他ノ必要ノ樹木杯を、種
もよし。





総て、天然の地質ハ、變し難
 一といひと、中等以下なる
 地質よて、弱土を、強土とし、
 又ハ、堅き地やちけ、ねむ
 き地もろくく、浅き地深く
 し、軽き地引きある杯ハ、人
 の精不精よて、其質地變らるるを、
 ろよ心哉用あべし、
 地質よ因りて、植物よ適不適あり、
 假令ハ、稲ハ汚
 水の流き入るが、又ハ、水利のよき地
 又適一麥を

黒墳とて、黒土の能く肥へあるを好み、
 粟、黍、桑ハ、黄
 白土の肥良あるをよしとい、
 何品よても、糞養を
 用あけりて、能く成育する
 ハ、其地よ適一あるとある
 べし、



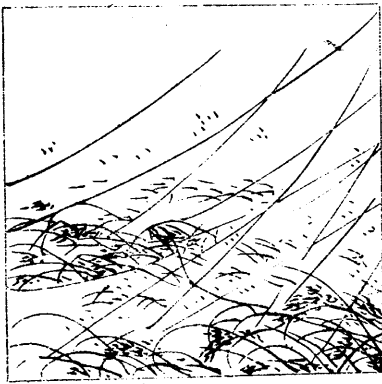
地質も、人の性質よ同く、
 各其近き者あまハ、之地能
 く考へ、其適する者哉生育
 するハ尤肝要あり、
 農家ハ、常よ曆地見て、土用ハ、
 専、其他、季候の變り

試語記、風雨等の變あらんことを能く慮る可
 曆候見る、八月より、わらす、四季ハ、節候用ひ
 て、七十二候を誤る可らば、然れ共、山川の位置は
 より、又ハ、南北の氣候又随ひて、各地、適當の候あ
 れ、一偏に定免難し、其地、於て、時節を豫定考
 へ定免よか、
 穀類、及び、草木の類ハ、凡節の氣候より、さき立て、
 生さるものゆへ、種藝ハ、早さハ、害うすといへ
 と、遅きハ損多し、

若し、時又後よりあらハ、糞養の強くして、温度候
 進む者候、下し敷きて、植るをよろしとせ、
 一日の中、ても、種藝ハ、なるへく、午前をよしと
 せ、さきとも、菜類の苗、杯候、種るハ、日光やりのさ
 て、夜氣候、受くる、近き時、
 又ハ、兩氣ありて、曇る日、杯
 ハ、尤よろしきなり、
 抑、豫定事を考へ定むるの
 必用なるハ、前にも言へる
 如く、農事、かきらばとい



へとも、農家ハ、殊更ニ、心を用ゐざる可らば、一時
此風雨ニより、数月間の苦勞も、忽水の泡と消え、



空くまゝること、間々多し、必
らば、油断を可らば、
古人の詩ニ、一寸光陰不可
輕とひひ、又惜分陰、杯とひ
ひて、一寸や一分の時間よ
ても、容易ニ経過して、は、と
り戻りの、なほぬことなきハ、農家ハ、殊ニ怠惰を戒
めざる可らば、

己ニ種を蒔き、苗を種て、後ハ、農家の勤ハ、専ら、田
畠の草を、抜き去りて、其根を絶つニ在り、惡草ハ、
蔓り易く、穀物を害まら、甚速ならず、故ニ、草の目
ニ見へざるニ、中打して、芸らハ、上の農人なり、

穀類の中打杯ハ、強く暴く
せむること、草の根を、
絶つのみよて足まり、
中打ハ、数多きをよると、
一作ニ、委しく十遍も、為せ
ハ、實のりよると、なる、



総て中打を為し、心得あり、初ハ、草の芽、たゞんと
もるを、削り殺し、なまハ、軽く為し、其次ハ、植
物、未だ立根のみならず、脇根、榮へさせ、ハ、深く中打
し、底、地塊を碎き、根底の氣を、能く廻らし、可し、是
より後ハ、脇根、稍く蔓まると、故、次第、淺く打をよ

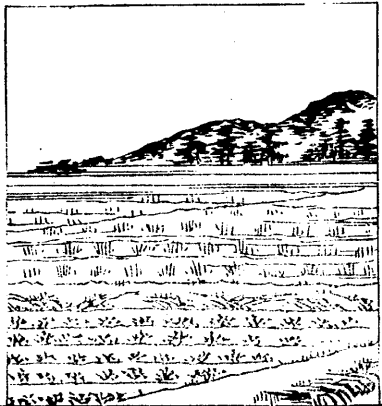


一と云

田畠の、近き邊り、ハ、草を
少しも、置く、つらら、少し
よても、草、あまハ、地味を奪
ひ、滋養を吸ふ、故、又、其害甚

一、良農の、田畠の、清潔なるを、手本と為し、可し、

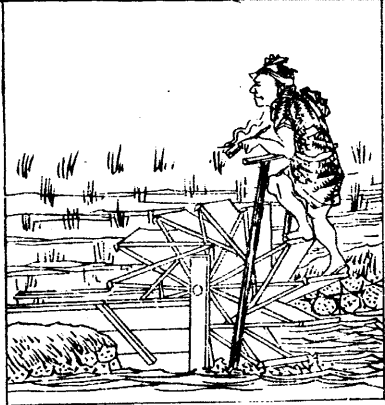
地氣の、濕ふ、多る時、ハ、鋤を
る、より、ハ、乾きたる時、を、宜
し、と、以、中打ハ、地質を、和ら
け、温氣を、流通せしむ、る、為
免、ち、是、ハ、乾き、多る時、の一
回、ハ、濕ふ、多る時、ハ、為、以、四



五回、も、相當し、其功、多け、れ、ハ、なり、

総て、鋤芸を、怠ま、ハ、土地、固着して、瘠地、又、變、以、る
者、有、ま、ハ、移、も、あ、る、又、心、付、け、細、か、し、打、碎、き、根

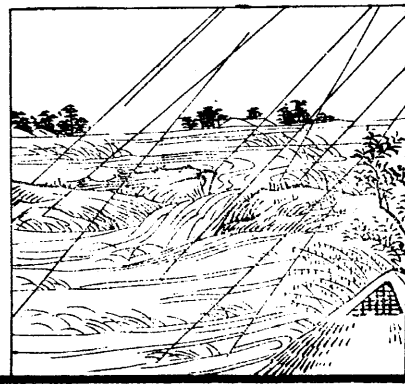
底の土が、上下に交換をば、根際厚けは、早時
も痛まらぬ、風雨も倒まらぬ、其功多き者なり、



○前にも云へる如く、耕作
ハ、水利の便否より、大
損益あり、稲ハ、水田より
らぎまハ、生長せぬ、又、水乏
しけまハ、直に枯る者ゆ
へ、水利ありき地へハ、早稲
を作す可、又ハ、他の植物を種る可し、
水利の便を開くハ、種々の仕方あり、其地の位

置と、高低より考ふ可し、水利あり、池川も
なく、雨水をうりを頼みて、水稻を種る者あり、
も、必に損失を免む難けま、為に可らぬ、
耕田ハ、煙濕の度、よからま、必に早水の憂あり、
故に、高田より、常に水を灌ぎ、水田ハ、能く乾か
して、日よあはる等、尤農家の大事なり、
農家ハ、常より云へる如く、水利の便否を考へ
て、後、種藝の品類を擇ぶ、特に、稲のみに限る
可らぬ、其地利より、野菜あり、茶、桑、楮等、耕作餘
暇の業、種々あり、

扱獲収の時又至るハ能く
 注意し鎌ハ尤又薄く切ま
 味よきを選び、稻ハ充分熟
 一多る時を刈る可一三三
 日ハ遅きも却てよ一麥、蕎
 麥、黍、杯ハ少一早きをよ一
 とけ、尚次回又説く



獲収の期又當り、霖雨杯何るよハ、殊更注意せさ
 是を損失多一、稻例も水中より出芽し、見ると思
 ひきることあり、

霖雨をらんとおもハ、少し早くとも刈取り、籬
 又ハ竹、木杯を掛けわとして、掛干しよげべ一、

第四



浸し、後二三日、青天又干し、莖ふて之を蔽ひ、自然

穀類の中、稻ハ、まきハめて、需
 用多く、本邦バ目けて、瑞穂
 の國とも云ひ、上下一般の
 食料と用おれハ、耕作の業
 古より盛りなり、
 稻ハ、最初廿日前後、種子成

農家言本
も、もやー芽の二分はうり、出るを待ちて、苗代又
蒔くをり、

苗代ハ、稻の生る原をまハ、尤肝要なり、疎か
為レ可らば、然るも、年々、其場所を替へば、舊地
作るハ、大なる過ちとつ可し。

年々、地を替ふまハ、苗肥つて速かま生茂し、其根
も、亦繁き故も、田も移せも、早く根つき、葉出て、地
を覆ふハ、雑草も、生る能ハば、諺も、茂木の下も、
繁草ぢーとかいへり、亦此理のみ、

苗代水のうけ引ハ、大切の務なり、種を蒔き、十日

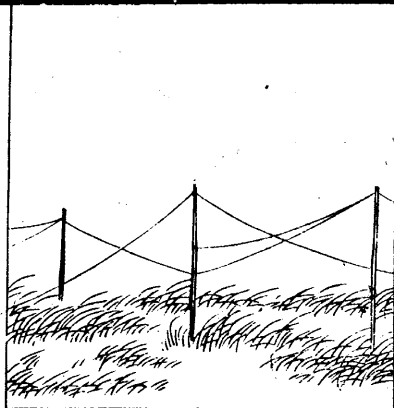
何まりもて、少し青みの見ゆる時、水枝落し、二日
むくり干し、其後も、木の如く、水を入るべし、
苗代を、何す折ふし、雨のうら事あらハ、水を入れ、
雨もて、根を叩らぬよふす可し、

苗を、さす株の數ハ、およそ、
一段の田も、三萬を中分と
す、これ、一步も百株の、より
かり、ぎまとも、肥たる田も
ハ、薄く、やぎ田にも、厚く且
株も、多少のむらふきやう



よりゆへー、
扱田植ハ其土地の寒暖より遅速あるハ勿論
なきとも凡冬至より百三十日余ハ早苗を取り
中田を五月の節より名晩田を夏至の前後に種
終るを定るとい

或老農のいへるは苗を植うるは常の植りより
少しつて根をふりく植うれば大に利あり穀
の實けりも殊に大風をあひても倒るゝことな
しといふことなきを風は倒きたる株と倒まざる
株の根を手をさし入れたえし見るに縮の根浅



きハ倒き深きハ倒まじと
か其言葉まあと云理有り
といふ可し

凡深田ハより扱えども大
陽の温氣を導き春の耕り
より干田よりなれつきハ云

よ及まず始終日光はあはるおと第一肝要なり
水深くして温氣下まるとほらきまハ苗やうえ
ぬ故井手よりなりとまで水の自由なる田ハな
るべく水を浅くして根まで温氣のとほる工夫

を為はづし、

高田ハ、之ヲ又して、半日
ても、水なくてハ、忽、苗の痛
む憂ゆり、されとも、刈り
のまゝ前より、水城
落し、稲の根をさらし、堅免



おき、青穂少くも、なくなりて、能く熟まを待ち、
日和を考へて、刈りつゝ、根の土、堅けまハ、實も亦
堅く、熟まるものなり、

稲を刈りて、後、于にハ、高田ハ、其儘、おろけ干に

もよといへど、なるたけ、溝の土手、木枝うゑ
おき、其枝よりけて干し、又ハ、竹を、三本結び合せ、
泥中、立て、其先、二方、稲を掛け、干しをよと
に、水場杯ハ、専らこれを用ゐ可し、



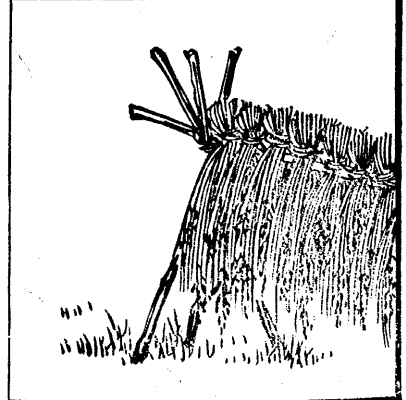
刈り収むる物ハ、稲よりき
らに、由断なく、水火の来る
を、防くよ、速く為さる
可らに、手まわしゆるく
て、多くの苦勞を、目前、空
ふまゝ事阿し、殊更、稲ハ

其莖のいまだ、くたけさる中、刈収むべし、
稻は雌雄の別有り、雌穂ハ、雄穂より、収穫格別
ふ多し、其穂立ち、長く、数多くとのりて、粒も、亦大
なり、穂の先、両つに分きて、枝多く、又、其枝の中
へも、各、岐分したまハ、穀の多きハ、一見して知ら
るべし。

又根も、雌穂ハ、必、二段、根を生じて、土中、根
入り深けきハ、大風にも、倒るることなく、霖雨等
よて、水溢ることも、いたまは、早魃の時、水あらず
も、根入深けきハ、凋むことなく、いもぢ虫喰杯

も、やまなり、是は雌苗の
徳なり、

雄穂ハ、こまき反し、穂先、一
本よして、穀實比らば、形す
うれて、其粒も亦少く細し、
種は用う可らば、根も亦一



段よして、浮根多く、堅根少き故、まきりの風
雨よも、いたまらちよして、早りよも困り易し、種
は用る可らば、

秋熟の時ハ、これを選択し、雌穂のみをとって、翌

雄穂



年の種と為可し、

雌雄の穂の粒数をもちる
は、少しの差ハ何れとも、凡
雄穂、一穎、粒数を七十粒と
まきハ、雌穂ハ、百五十粒も
何れハ、其益何れを知る可

まきとも、雌穂の種を、殖とまきハとて、其田全く、雌
穂のみ生まるるは、自然と、雄穂もまきより生
まきとも、雌苗より出たるハ、普通の雄穂より、収

雌穂



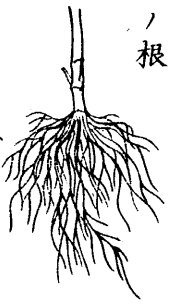
獲り、と、知るべし、是れ空理より、人々、秋又
到り、能く鑑定して、偽りなれざるを知る可し、

稲の雌雄ハ、苗の二葉の頃
より、根き、格別より、秋
よいとらばとも、見分けら
るべしといへど、苗代より
一株つゝ、えり出して、殖付
をなしてハ、無益の事故、秋

熟る時は、種を取擇むべきなり、
早稲ハ、又、をり穂とも云ひ、邊鄙にてハ、これを野

稻とも云へり、種は粳なり、糯なり、其中一種、占城
と称するハ、其莖大きく、高くして、芦の如く、穂も
亦一尺よりあるなり、糯に似て、粒の色ハ白く、並
よりハ少し大なり、これを早稻の第一と云ふ。

雄ノ根



雌ノ根



凡、此の稻を作るの地ハ、水
田にせハ、水乏しく、畱に為
せハ、濕氣有りて、いつまも
よからざる地杯に、植うれ
ハ、水稻にも勝きて、實れる
あり。

苗地ハ、冬よりよくおき、敷を水に浸す
と、三日ふいて、日干し口、此少しひらくを見、灰
こえよて、麥の蔕足はともむらなく、まくをよし
と云ふ、土質おあふも麥と同じ、屢水糞を用ゐ可し、

早稻



苗の長さ、七八寸なるを待
て、灰糞よて、麥の如く一株
二、三四本、焼地を、ハ、四五
本を、植する可し、中打も、麥
と異ならぬ、常に水糞を注
ぐをよしと云ふ。

支那國にて、毎年早損ある土地に此種を植へ初
免しより、後、飢饉の憂を、免かましとかいへり、
総て、農事ハ何事より、昔より、作り来る物の
みとおもひ、廣く工夫を用ぬ、又ハ怠惰より、



他の物ハ是地よあもぬと
えりおもひ、試み、或ハ
試むるも、不勉強にて充分
ならぬを、其す、工夫も為
さずして、棄つるハ口おし
きふと有り、能く耕作ハ、利

潤を考へ、為に可きなり、

第五

麥ハ、穀類の中、亦、尤、有益の品にて、稍、又、亜く、食料
の第一なり、其種類多し、

麥ハ、黒墳より、と云ひて、黒土、はよき質を、好
み、風、又ハ、雪霜、は痛み易し、故に、冬ハ、陽氣、土中
あるを以て、其根少し、ても、底、は深く、いりて、温
氣、は合はんと為せ、ハ、筋を、底、ひろよ、まきること、肝
要なり、立根、深く、土中、はあき、ハ、上ハ、寒氣、は痛み
莖の、あう、く、なるも、春、は到りて、温氣、を得、ハ、大

生長せん、又、根深くして、培ふこと厚けきハ、少
 の風雨も、倒せぬ、實のりよきこと、疑ひなく、
 麥種を、蒔くも、あつくまけきを貪り、間をせまく
 蒔き、又ハ、一所よりたまりし杯ハ、中打、培ふこと
 も、有りうたふして、植物の根も、日光、又ハ、風のと
 ぬることなき故、日蔭の草も類し、實のり薄けき
 ハ、心得可きことありし、

麥、いまを實らざる先も、其年の豊凶を知るの
 さ有り、麥ハ、苗一本より生ひ立て、幾本も滋生
 て、實れる故、其苗を抜き見るに根七本以上有り

麥ノ穂



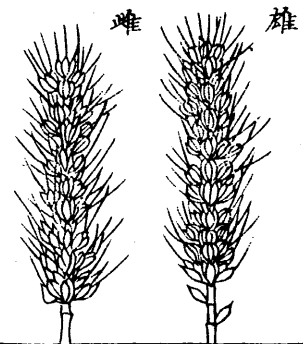
ハ、豊年といふ、いかさまハ、
 根の多き程も、莖の數も、亦
 多き、こと有りなきを、
 小麥ハ、多く麩となりて、食
 用とす、麩ハ、温飽又作るを
 以て、温飽粉とて、これを
 作るハ、亦大麥よりなることなり、只少し、早く蒔
 くをよしといひ、糞養より、根の腐ること杯あり、
 専、灰糞を用ひべし、

小麥を作り、耕田ハ、瘠るの憂ひ有り、故に、土際

すり、つゝて刈り、耙^ハまで、うくとときハ、麥株を、うき
去るをよくとけ、

稻、又ハ麥杯も、掛干し^ハ為^レ後、稻扱、麥扱まで、
稗と粒とを、扱き分くるなり、往古ハ、稻こきと^ハ

小麥ノ穂



ふ、器械さへなく、扱箸と云
ひ、箸二本まで、少一つ、た
さゝて扱きしとかや、今ハ
麥扱杯も、九尺余の長さ^ニ
作り、多人數並ひて、まき、楚
ま干して後、唐竿まで、打お

とけごと、ちきり、尚此上^ニも、便利の器械を作
り、多人の勞^ニ、かたる事をおもひ起すハ、農家の
欠く可^レらさる要務なり、

稻麥^ニ、並く穀類ハ、其他、黍、稷、粟、秫等なり、蜀黍ハ、
畧して、唐と稱へ、玉蜀黍ハ、又、南蠻まびと^ハ、糝
ハ、穂細くして、黍の如し、以上の穀類、皆粒食を為
す可^レと^ハ、一とも、稻麥の如き、大益ある者^ニ何
ら^レ、

蕎麥も、亦食料^ニ充ま^レと、滋養ある者^ニ何ら^レ、只
山間の荒地等^ニ作ま^レハ、地味を和らくるの功^ニ何

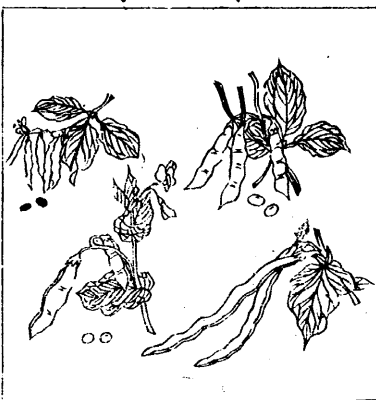


りて、利益多し。

豆ハ、形又大小の二類あり、
豌豆、蠶豆、刀豆、藤豆、隠元、大
角豆、杯ハ、これを別種といひ、
大豆ハ、黄、青、白、黒、楊、斑等の
色ありて、夏秋の際、専ら、黄
白を作る、小豆も、亦、赤、白、緑の三ありて、尤、小粒
を貴ぶ、豆類ハ、凡百二十日よりして熟せり、未の
莢、少し青き中より、かるを頃といひ、小豆は三青、四黄
といふことあり。

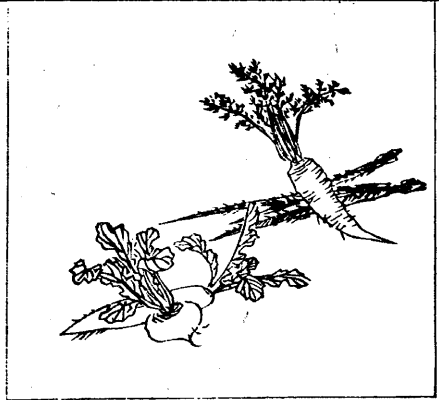
蘿蔔ハ、四季とも在り、

れとも、夏の終り、秋の初より、
蔕くを法といひ、細く小きを、
細根大根といひ、細くして、
長きを、波多野大根といふ、
共々、其種を異にし、地味よ



よりて、形の大小を替ふる者あり、尾張の宮重大
根、薩川の櫻島大根等ハ、殊又大なり、蕪薯も亦、蘿
蔔と同じく、葉莖根共々食用となり、野菜なり、秋
の中頃迄は、蔕く可し、極えて大なるハ、近江は産

伊豫に在る、其塩漬とちりて、色赤し、緋の蕪
 菁と称ふ、



又、生れるも悪し、けき、去年の古種を、よろしと云、

牛蒡ハ、細軟沙の地をよ
 といふ、其若き間ハ、莖葉も
 亦食用と為可、種ハ一
 反、一外を蒔く在中と云、
 尤雑草を嫌ふ、野菜なまハ、
 務免て、とり除くことを要
 以種ハ、當年の實ハ、生せ、

胡蘿蔔ハ、根の黄なるを、擇みて作る可、地味の
 乾き多きを好ま、畦の中、常ニ少、潤ひあるを
 よしと云、若き間ニ、間引て、五六寸、一本つ、程
 二、三、上を能く踏付け、浮きて葉のみ茂らぬよ
 ふにべし、

羊の種類多し、里羊、唐羊、ハ
 頭羊、蓮羊等、皆、莖根共ニ、食
 用とせり、地味を擇むを、
 第一とし、舊地を嫌ふ故、一
 二年つ、土地を替へ、能く



培養をきハ、一及より、三拾石も得らるるものあり、
薯蕷、佛掌薯、杯ハ、古より、この名を、称されとを、
自ら別種あり、甘藷、馬鈴薯も、亦、別類より、其名
を、胃かき者といは、



葉のみを、食用といはる者ハ、
漬菜、冬菜を、第一といは、
苜蓿、菠薐、紫蕪等これより次
ぐ、
根も、亦、食ふべしといは、
も、専ら、葉莖を、食ふべきハ

芹類あり、莖根とも、食用とせらるハ、葱、野蒜、
て、蕨、薇、獨活、筍ハ、嫩苗を用ひ、秋冬ハ、花、及び、莖、葉
共、食せらる、其他、山葵、薑、蓼、蕃椒、等ハ、辛味あり、藜
荷と共、他の味を、資く可きあり、

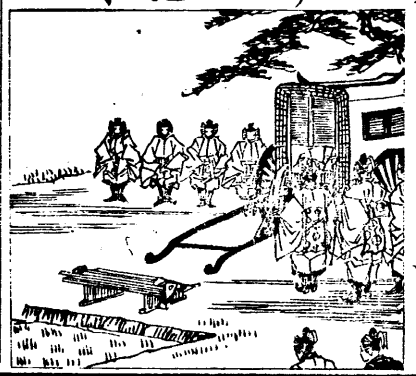


實を食するハ、瓜、茄を最といは、瓜ハ、冬瓜、白瓜、黄瓜、
醬瓜あり、茄ハ、色ハ、紫と、青
とあり、形ハ、圓と、長とあり、
又、唐茄と呼ぶ者ハ、南瓜の、
扁とき者より、瓜の類あり、
茄類より、瓜の類あり、

消ゆる頃、種を下し、茄ハ成長するに從ひ、床より畝に移し、瓜ハ、三葉、四葉の時、先を摘み去るべし、尚他、野菜の類多し、其一斑を示しのみ、何事によらず、勉強して、培養を怠らば、其應分の利益何るハ必然にて、天時も、地利も、一か、地利も、亦人知る若くは、とかひ、人カみして、天工を奪ふことなきよし、人の心、田も、亦かくの如く、培養よりて、善惡の結果有り、勉強して、學問を修むるハ、我心を、耕作するに、同一けし、ハ、能く斯理を考へ、賦性も、優らんことを勉むべし、

第六

夫は、耕作の業ハ、種々なまとも、植物生育の理を究むるハ、播種、収實、皆一にして、毫も、其道を異にするることなし、是は、造化の妙カよりて、然らじむる所は、あらざるハなし、故に、農事ハ、造化の功を、たすけて、成育を、遂げしむるの、目的なるを、以て、天時を、逐ひ、地理より、因り、其業を、勉めざる可らば、



往古よりハ、歴代の帝王、必以、農業を奨むること、治國の基とし、春の始、田より出て、手つらら、農具を取り、耕地を、犁を藉田と稱して、これを政事の初とせしむるなり、方今も、朝廷より、年々、祈年祭といひて、豊年の御祈り、かくの如く、農事ハ、最重んば可き業ぞ。

よかきとも、農家より限り、平均、富えらるハ、稀にして、貧しき者、多し、人々、其本を勉め、却て、其末より趨るを、おろよろしと爲はる者、なきは、是れ無益の業にして、農家の、最戒む可きことなり。

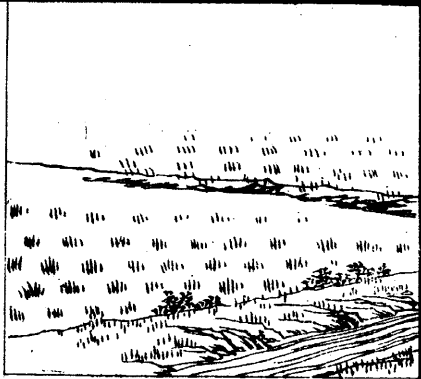
農家ハ、殊に、平生財穀を蓄へて、不時の天災に備へべきハ、凶年のとき、餓死を免るゝこと難し、能くこれを考へ、第一、我身を謙遜し、儉約を守りて、其分限を忘る可らば、

珠玉の、寶貨有りといふとも、飢寒を、防くの益、たけは、無益の玩弄物、杯は、財寶を費す可らば、農家ハ、衣食住の費用とても、過分なるハ、破産の本なきハ、奢侈を戒めよ、無益の費用の多きより、遂に、地租の上納もさしつらひて、國民の義務を欠くよ、到るハ、實は、耻辱の極なり、

古人の言ふ、民の如きハ、恆の産をまき者ハ、恆の心
 なしと云つり、恆のおゝろなきものといハ、勤を盗
 み、業を盗み、其上、光陰を盗む者杯を、つゝなるべ
 し、苟もお比心なきものハ、恆の産何る者といハ
 とも、後ハ、失ひ棄るゝいたること多し、故ハ、恆
 の心ハ、一日も欠く可らざる者あり、

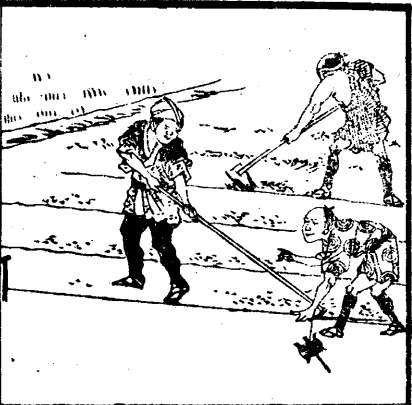
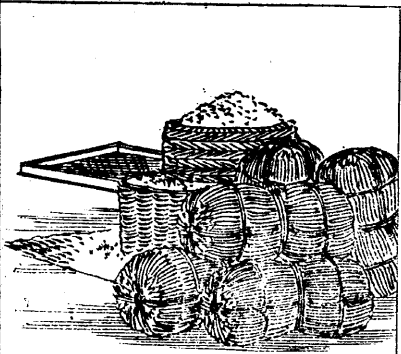
何事でも成るハ、天ニ有りて、計るハ、人ニ有り
 といハ、耕作も、亦、天災ニ歸して、凶年を嘆くハ、
 能く計りことの得たる者ニ何らば、

光陰を惜み、業を勵むハ、良農の所為なり、て、富國



の基ひ、これより外ならば、
 昔、或る近傍の村落ニ、世の
 外なる老人有り、若年より、
 諸國を経歴し、廣く世事を
 知り、尤農業ニ精ハ、く、妙
 を得たり、かえ、我の國の、
 長臣、これを試みんとて、我
 采地の中、殊ニ惡田を撰りて、渡しぬ、其地ハ、焼山
 の谷、何いよて、極えて、瘠地なるといハ、あけの錆、多
 く出て、赤き色の水、常ニ流まり

叔、老人ハ、お此悪田をうけとりて、熟々方位を考へ、地形を見て、其田の一方又深さ三四尺計りの大溝をほり、彼の悪水を落し、其地をたぶくまきりえ、春中、日よはら、干田となし、五月雨の頃を見て、苗を植へたる、年久しき水田を、春中、さらしおきて、温氣をおえ、殊、其上、芝草を多分入、雨よくをらせ、ことゆへ、秋又到り、豊熟して、三石餘の



収穫あり、と此田、並の農人、作り、時ハ、非常の豊作と、つゝ、一年、ても、壹石の収穫ハ、覺束をりし、ふりと、是、是、全く、勉強と、注意の、徳と、つゝ、可し。

耕地を、測量する道具も、亦農家必用の器械なり、さまとも、家毎、備ふる、よ、及、これ、を、大方儀、小方儀と、つゝ、地坪を、も、り、り、て、六尺を、歩と、つゝ、三十歩を、畝と、つゝ、十畝を、段と、つゝ、十段を、町と

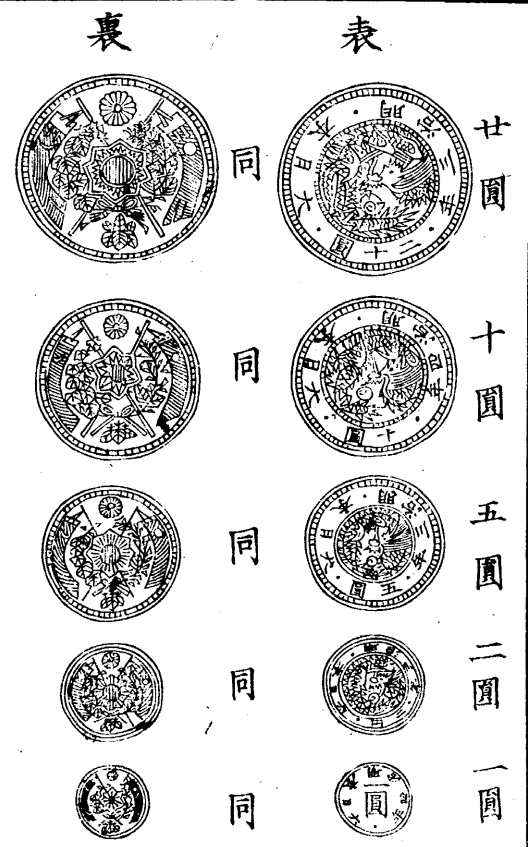
のふなり

第七

農家といへとも、日用貨幣の名は知らされ、公私の取引は忽ちさへつらへりまは能く心算と老て之は覺ゆる

貨幣は金銀銅の三種あり、又其他は紙幣あり、紙幣ハ金銀貨幣の代用なり、

貨幣紙幣の外は、各國立銀行より發行する紙幣あり、海關税と公債證書の利子を除く外は、公私一般金銀貨幣の代用として通用するあり、



以上五種の貨幣ハ政府の發行する所の金貨幣あり、

	裏	表	
			一圓
	同	同	
			五十錢
	同	同	
			二十錢
	同	同	
			十錢
	同	同	
			五錢

以上、五種の貨幣も、亦政府の發行する所の、銀貨幣なり、

	裏	表	
			二錢
	同	同	
			一錢
	同	同	
			五厘
	同	同	
			一厘
	同	同	

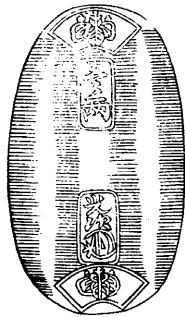
以上四種ハ、銅貨幣と稱し、亦政府の發行する所あり、

小銅錢一箇を、一厘といひ、十厘を一錢といひ、百錢を一圓といふあり

紙幣は、大小の差ありまとも、金銀貨幣の代用なま
ハ、必以、貨幣の圖行り、十錢、廿錢、五十錢、一圓、二圓、
五圓、十圓、五十圓、百圓の九種ありて、明治通寶と
書し、大日本政府大藏卿と、しる印あり、

銀行紙幣ハ、大小の差、各行共、稍、一様ありて、唯、金
數と、其頭取の名を、記る所の異ふるのみ、方今、百
四十余銀行の、多きよ、到きハ、其紙幣の數亦多し、

表



裏



表



裏



裏



裏



表



表

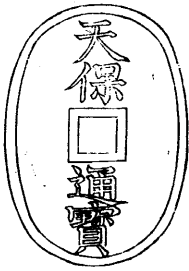


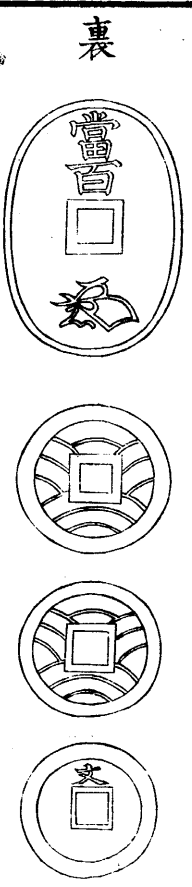
裏



右五種の金銀ハ、徳川幕府の時の、通用貨幣なれ
とも、方今ハ通用を為さず、地金として賣買せ、

表





右四種の貨幣も、亦徳川幕府の時より用ゐる者あり、

小學農家讀本卷之一終

明治十二年一月某日版權免許

定價金十五錢

著者

茨城縣士族 松本英忠
茨城縣常陸國第五大區六小區茨城郡上市毛村百五十七番地村上義孝男居

出版人

大阪府平民 前川善兵衛
第一大區七小區南久宝寺町四丁目三十五番地

全

山口恒七
第一大區七小區北久太郎町四丁目五十一番地

小學農家讀本

松本英忠著

卷二



大正十三年		
三	三	二
三	号	架
三	号	架

函架一號

東

五

五

